

新領域「希望（のぞみ）」

幼小中一貫教育校における研究推進マネジメント

—文部科学省研究開発指定3年間の研究主任の業務を通して—

松本裕子

1 はじめに

本学校園は、研究開発課題を「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」とした文部科学省研究開発校（平成24年度～26年度）の指定が今年度で終了する。その成果や課題については、本年度の報告書・別冊にまとめ提示することができた。

私は、この研究推進に、1年目は新領域「希望（のぞみ）」部会キャップ、2・3年目は、研究主任として携わってきた。特に研究主任の2年間は、校内の実践研究を計画的に推進するためのマネジメントが求められた。本学校園では、研究推進のための組織はある程度整い、その役割も明確であるため、各年次の状況に応じて部会等の構成を変更する程度で、研究を円滑に進めることができた。また、研究構想や各種提案内容の受け止め、子どもたちの実態を踏まえた主体的な実践、その効果の報告等について、本学校園の教職員の協力体制も得られた。

しかし、それだけに、研究主任のかじ取りが問われており、どのような展望を持ち、どのような構想を提案し、その構想に沿った実施の効果をどう評価してわかりやすく示すか等、研究開発という観点での取り組みは試行錯誤の連続であった。提案性のある研究構想の組織的な構築と教職員への周知のための資料作成、幼小中異校種間の構想・評価等の調整作業、実践の効果の適切なデータ処理や提示方法の検討、次年次の構想の再構築のための全体協議等、報告書には掲載できなかった取り組みや成果物も多々ある。

本稿では、これらの資料を見直し、3年間の研究主任としての研究推進マネジメントとその成果・課題を明らかにしたいと考える。そのため、研究成果物や全体研究部会の効果を自作の評価規準により整理して示す。結果については、今後の研究主任としての研究推進マネジメントや業務の効率化に生かしたい。なお、この評価はあくまで筆者個人の私見によるものであり、研究組織の検討を経たものではない。

2 研究開発の概要と研究推進マネジメント

(1) 研究開発の概要

幼稚園から中学校にまたがる新領域「希望（のぞみ）」及び「希望（のぞみ）視点の保育」を中心とした幼小中一貫自己開発型教育によって、社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成を図る。具体的には、①自分と向き合う活動の実施によるキャリア形成能力の自律的・統合的育成、②学校園内外のリソースを生かした「生き方」に関する体験的活動、③幼小中全期間を通じた基礎的・汎用的能力の育成に取り組む。検証は、[1]能力・態度及び価値観の形成状況の評価、[2]学力に関する調査（小中学生を対象）による実施单元及びカリキュラムの効果測定、アンケート評価や外部評価による。これらを踏まえ、今後の幼児教育・義務教育段階における求められる人材育成の在り方に対する提言を行う。

(2) 研究推進マネジメントと各年次の成果・課題

3年間の研究推進計画に対して行った主な研究推進マネジメントを表1に、各研究年次の主な成果と課題を表2に示す。

表1 研究開発の実施内容等と研究主任による主な研究推進マネジメント

年次	実施内容等	研究主任による研究推進マネジメント ※(数字)はその年次のみ実施した事項
1年次	(1) 研究開発に係る基礎調査・調整の実施 ①教育課程、校務等における新領域開発上の調整 ②「成長意識」「自己改善」等に関する児童生徒の意識調査を実施 (2) カリキュラム開発 ①教育・研究構想案作成 ②研究開発運営指導委員会による事前評価・中間評価の実施(7・11・2月) ③資質・能力の具体化・焦点化 ④活動・単元及び教材、学習指導法の研究開発、活動・単元実践試行 ⑤評価方法に係る研究 ⑥公開研究会の開催 ⑦初年度実践の評価 (3) 初年度研究開発の評価及び第2年次研究計画案作成 ①研究の成果と課題の明確化 ②教育・研究構想案修正 ③次年度教育課程試案及び年間計画案作成	P (計画) ・前年度に児童生徒の意識調査を実施 ・研究構想の作成 ・年間研究推進計画の作成 ・各種様式の作成 ・幼小中間の計画内容調整 ・教職員への周知・協議のための資料作成 ・評価計画(案)の作成 ・各種委員会の企画 ・研究開発だよりの発行計画 D (実施) ・授業研究・研究会による研究成果の普及 ・運営指導委員会の開催 ・研究開発委員会の開催 ・「希望(のぞみ)」部会への資料作成依頼、とりまとめ ・実践報告の作成依頼・収集 ・報告書の作成 ・研究開発だよりの発行 ・幼小中間の実施内容調整 C (評価) ・児童生徒質問紙調査の実施、集計、各部会による分析の推進 ・各単元におけるパフォーマンス課題の設定とルーブリック評価の推進(3年次) ・児童生徒の作成物・教師の見とり等による質的評価の実施・集計・分析の推進 ・幼稚園と小中の評価内容の調整 ・教職員、保護者アンケートの実施・集計・分析 A (改善) ・つきたい力、態度・価値観の焦点化 ・目標構造の改善 ・研究構造の改善 ・各種様式の改善 ・関連事項の整理 ・研究推進スケジュールの整理 ・幼小中間の相違事項の整理・調整 次年度へ
2年次	(1) カリキュラム開発 ①前年度作成カリキュラムの通年実施 ②研究開発運営指導委員会による中間評価の実施 ③活動・単元及び教材、学習指導方法の研究開発 ④公開研究会の開催 ⑤第2年次実践の評価 (2) 第2年次研究開発の評価及び第3年次研究計画案作成 ①研究の成果と課題の明確化 ②教育・研究構想案修正 ③次年度教育課程試案及び年間計画案作成	
3年次	(1) 改善カリキュラムの実施 ①前年度修正カリキュラムの通年実施 ②公開研究会の開催 ③第3年次実践の評価 ④研究開発運営指導委員会による最終評価の実施 (2) 評価及び成果に基づく提言 研究報告書の作成	

表2 各研究年次の主な成果と課題

年次	成果	課題
1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「なりたい自分」を合言葉に各学年、校種にて「希望(のぞみ)」の活動や単元を開発 ・保育、授業の方法の確立や資質能力の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼小中12年間の系統性の明確化 ・新領域「希望(のぞみ)」及び「希望(のぞみ)視点の保育」の特色の明示 ・保育・教科及び領域との関連性
2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの学習領域(学びの領域)の設定、目標構造図の作成による、12年間の系統性の明確化 ・単元、活動のねらいを明確にした指導と評価の実施 ・つきたい資質能力と態度・価値観の育成と評価方法の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ・因子や活動のねらいを焦点化 ・各学習領域(学びの領域)を関連付けた単元開発 ・積極的に粘り強く取り組む学習展開の工夫 ・評価計画・方法・検証の改善 ・教科と「希望(のぞみ)」の関連性の明確化 ・道徳・特活との関連の検証 ・幼稚園後期の「自分づくり」を意識した活動の開発
3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・つきたい資質能力と態度・価値観を焦点化し、相互に関連付けた新目標構造による実践・検証 ・各学習領域(学びの領域)を関連付けたダイナミックな単元開発と「希望(のぞみ)」の学習サイクル活用 ・評価計画・評価方法・検証方法の統一(実践事例記載) ・教科と「希望(のぞみ)」の関連を図った取り組み ・道徳・特活との関連の検証(実践事例記載) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「保育・教科」と新領域「希望(のぞみ)」の幼小中12年間一貫のカリキュラム開発 ・幼小中12年間一貫の「発達と接続」を意識した、適切な学年区分による仮説検証 ・幼小中12年間の成長を見とることができる、評価方法の開発

3 評価対象・評価規準・評価方法

(1) 評価対象

① 3年間の研究開発推進のために作成した主な
図表・児童生徒質問紙・実践事例様式等：7
群31項目(図1～7)

② 3年間に開催した全体研究部会：24回
(表3～4)

(2) 評価規準

次の評価規準により自作のマトリックスを設定
した。

研究の成果物については、①資料作成の難易度
(A：低い B：どちらともいえない C：高い) ②
実践やその効果検証への有用性(A：なくてはなら

なかった B：どちらともいえない C：なくても
よかった) ③研究開発校としての提案性(A：提案
性がある B：どちらともいえない C：提案性が
ない)を評価する。

全体研究部会については、①研修準備等の難易
度(A：低い B：どちらともいえない C：高い)

②実践やその効果検証への有用性(A：なくてはなら
なかった B：どちらともいえない C：なくて
もよかった) ③研究開発校としての提案性(A：提
案性がある B：どちらともいえない C：提案性
がない)を評価する。

(3) 評価方法

3年間の実践やその効果の検証を踏まえて、上
記評価規準による評価結果を考察する。

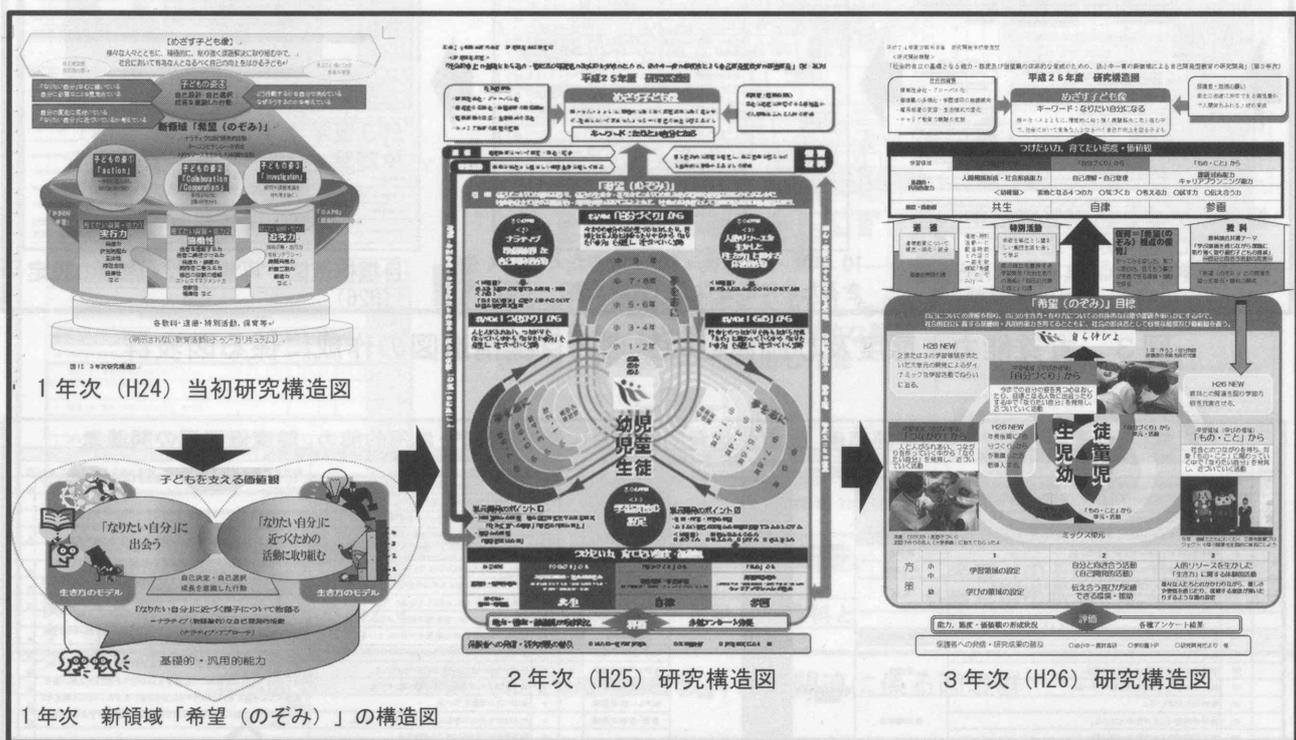


図1 研究構造図群

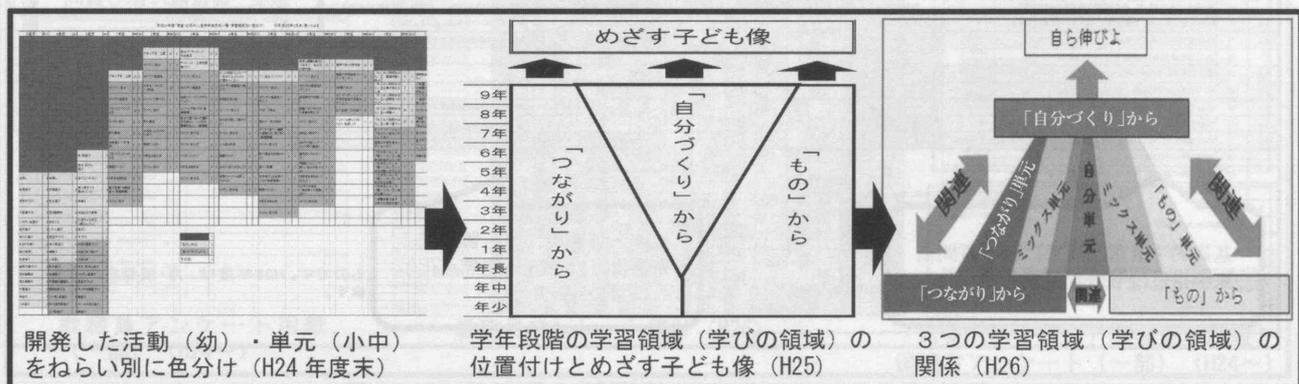


図2 3つの学習領域の設定と関係付けに係る図表群

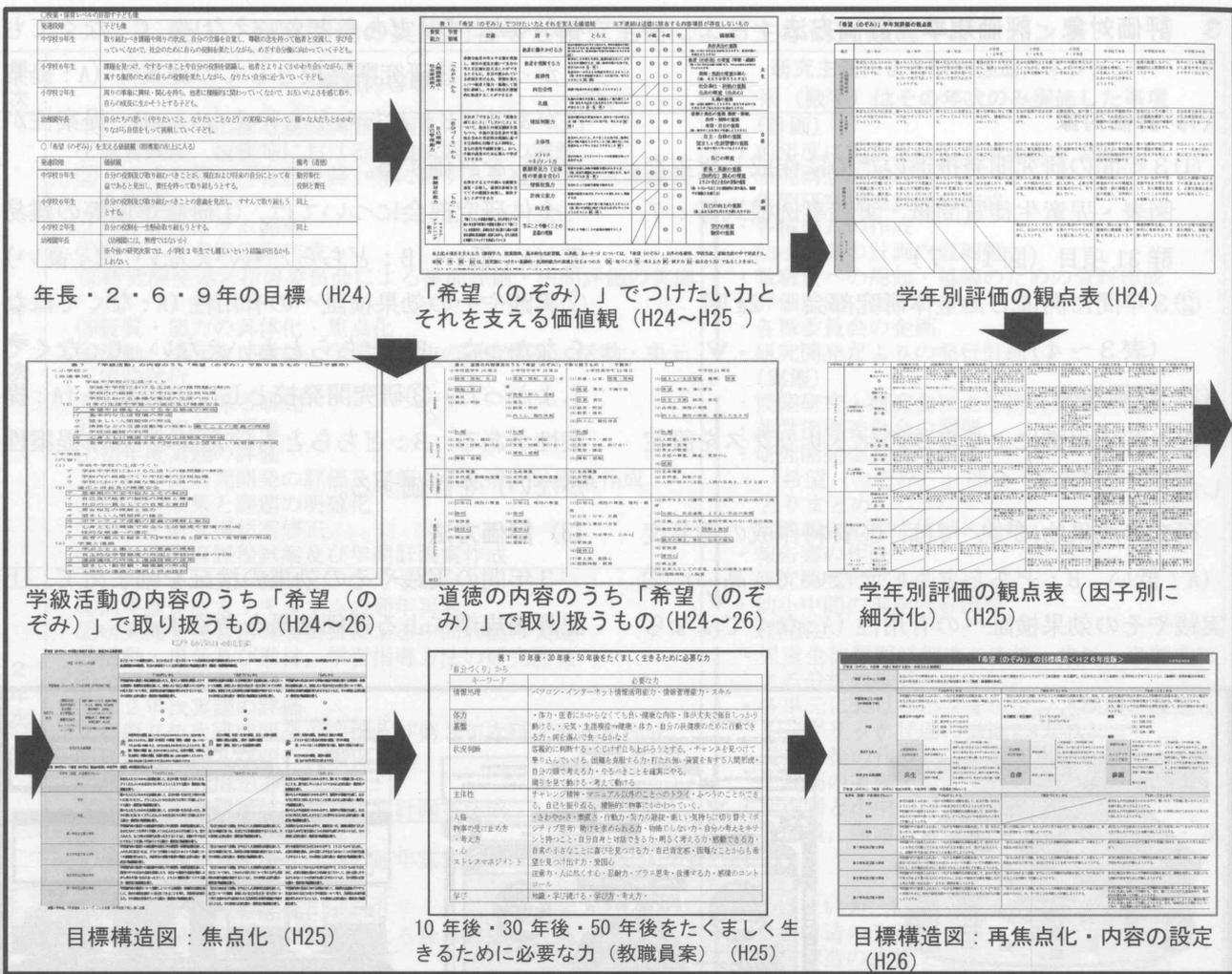


図3 資質能力・態度及び価値観の整理と目標構造図の作成に係る図表群



図4 資質能力・態度及び価値観に係る児童生徒質問紙の関連とその変遷

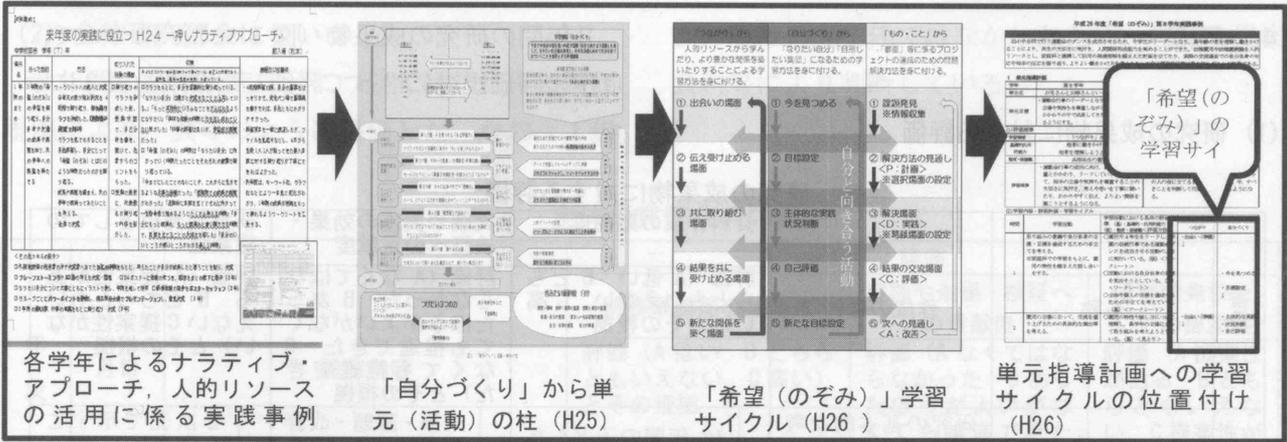


図5 自己開発のための学習スタイルの確立に係る図表群

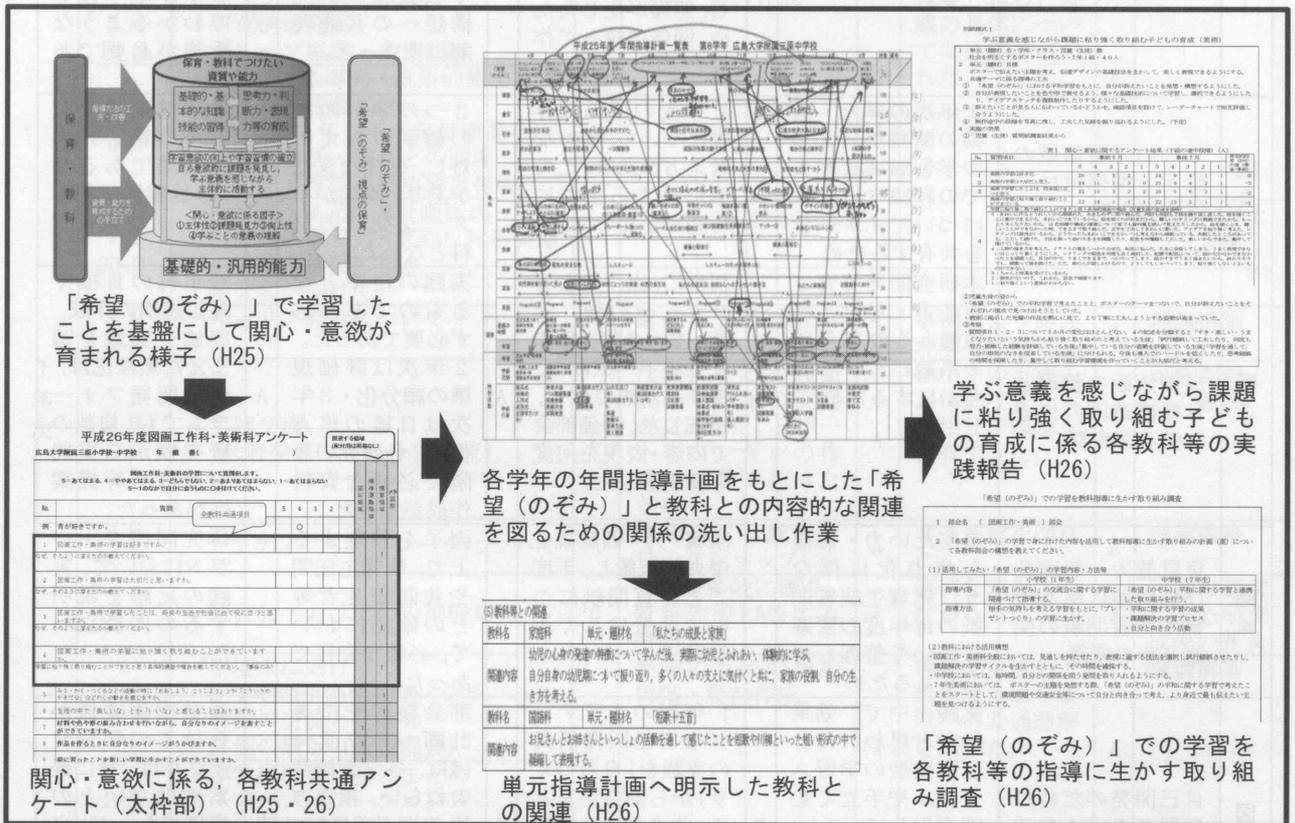


図6 「希望(のぞみ)」と教科との関連に係る図表群

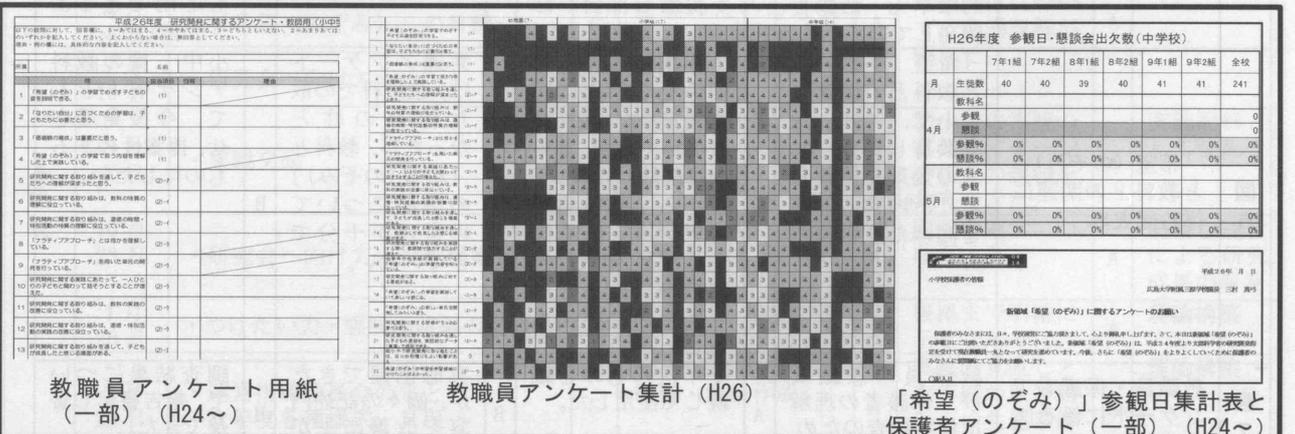


図7 教職員・保護者アンケートに係る図表群

4 評価

3年間の研究の成果物（図1～7）について、
自作の評価規準に沿って評価した結果を表3に示す。

(1) 研究の成果物に対する評価

表3 研究の成果物に対する評価

番号	名称	作成の目的	資料作成の難易度		実践や実施の効果・検証への貢献度		研究開発校としての提案性	
			評価 (A 低い B どちらともいえない C 高い) とその根拠		評価 (A なくてはならなかった B あったほうがよいがなくても推進できた C なくても推進できた) とその根拠		評価 (A 提案性がある B どちらともいえない C 提案性がない) とその根拠	
図1	研究構造図群	研究の基本的な考え方について、図式化し、イメージを共有化するため	C	12年間の子どもの育ちと、すべての教育活動の関係の両方を示そうとし、無理が生じたため、関係に絞って作成していった。	A	成果・課題・改善策を踏まえ、毎年図を改善することで、研究主任間や教職員の研究構想への共通理解に役立った。	B	2次元で示すことは難しい部分もあるが、12年間の幼小中一貫の学びが一見してわかるような改善が必要である。
図2	3つの学習領域の設定と関係付けに係る図表群	1年次の単元・活動の開発から3つの学習領域設定までの経緯や、関係についてイメージを共有するため	C	2年次の関係図作成について、様々な考え方があり、この形に納まるまでに時間がかかった。	A	3つの学習領域の個別の捉えに対し、多様な意見があり、本図がイメージ交流の材料となった。	A	本学校園オリジナルの新しい学習領域であるため、提案性はあった。
図3	資質能力・態度及び価値観の整理と目標構造図の作成に係る図表群	本研究開発で育てる能力・態度・価値観とその12年間の系統について明らかにするため	C	初めに、出口である9年、その後、年長・2・6年、その後全学年へ広げた。毎年次、焦点化し、修正した。評価部会で内容・表現を何度も練り直した。	A	実践の規準となるものであり必ず必要であった。2年次は評価規準の細分化・3年次は目標の焦点化等、各研究の段階で必要な資料作成ができた。	A	学年毎の目標や評価規準の作成、実態や実践を踏まえた焦点化は、研究開発フォーラムでも、複数の研究校から質問を受ける等提案性があつた。
図4	資質能力・態度及び価値観に係る児童生徒質問紙の関連とその変遷	育てたい力・価値を焦点化に伴う、児童生徒質問紙の毎年度の変遷について整理してとらえるため	A	領域・力・価値観を中央に配置し、年度ごとの質問紙について色分けして示した。	B	因子を整理する上で、研究主任間や共同研究者等との確認において、必要な資料であった。	A	研究開発フォーラムにおいて、実践の足跡を説明するのに役立った。
図5	自己開発のための学習スタイルの確立に係る図表群	実践の中で、効果的だと思われた自己開発型の学習スタイルや手立てを図式化して示し、実践者の共通理解を図り、より効果的な単元・活動を開発していくため	B	1年次のナラティブな自己開発活動の実践を「自分づくり」から部会がまとめ、さらに、各学習領域毎の学習スタイル案を研究主任が提案し部会が修正した。	A	部会検討や指導計画への位置付けは、各学習領域のねらい、指導方法の明確化につながった。	B	運営指導委員からはこの学習サイクルは、特に提案性はないとの指摘であった。自己開発のプロセスとして教科へも応用できるよう改善したい。
図6	「希望(のぞみ)」と教科との関連に係る図表群	「希望(のぞみ)」と教科との関連について、イメージを共有したり、実施の効果を検証したり、内容の関連を図ったりするため	C	1年次に整理した関係を2年次に図式化したが、適切な表現ができず、3年次は削除した。2年次から全教科共通のアンケートを実施した。3年次は年間指導計画を活用し関係の洗い出しをした。	B	共通アンケートは、全教科での取り組みの柱となったが、教科と「希望(のぞみ)」の関係についての整理が十分できていない。	B	幼小中一貫の教科アンケートとして、今後発展させ、提案性のあるものにしたい。
図7	教職員・保護者アンケートに係る図表群	教職員の意識及び、保護者の理解に係る調査のため	A	1年次のものを継続して使用した。	B	実態把握できたが、個々の記述内容を改善に生かされていない。	B	調査結果について、報告書示し普及できた。

(2) 全体研究部会について

次、私は研究主任ではなかったため、当時の提案

3年間の全体研究部会については、自作の評価
規準により、表4のように評価した。なお、1年

資料等により判断している。

表4 全体研究部会の評価

年次	月日	提案内容	評価					
			研修準備等の難易度	実践や効果・検証への貢献度	研究開発校としての提案性			
			評価 (A低い Bどちらともいえない C高い)とその根拠	評価 (Aなくてはならなかった Bあったほうがよいがなくても推進できた Cなくても推進できた)とその根拠	評価 (A提案性がある Bどちらともいえない C提案性がない)とその根拠			
1年次	4月4日	・研究開発の目的 ・キャリア教育の課題	C	提案のための理論構築・資料作成	A	3年間の研究の概要とねらい実践の具体について共通理解が図れた。	A	理論構築
	5月10日	・研究構想提案 ・グループ協議・全体討議						実践記録として普及
	6月4日	・合言葉、基礎的・汎用的能力及び価値観の定義づけ (年長・2年6年9年目標提示) ・道徳・特活・教科との関連 ・研究開発学校連絡協議会報告					A	理論構築
	7月20日	・指導案、単元指導計画様式・実践の記録の取り方・求められる実施の効果、検証の視点 ・研究会へ向けて						実践記録として普及
	8月2日	・キャリア教育について	A	講師による講義形式	A	事例により共通理解を図れた。	A	理論構築
	8月5日	・実践交流 (代表発表・グループ交流)	C	代表による実践発表と学年1の実践を交流した。レポートやプレゼンの作成が必要であったため。	A	幼小中の実践の具体的なイメージや相互の課題を共有できた。	A	実践記録として普及
	8月27日	・ナラティブ・アプローチについて	A	講師による講義とワークショップ	A	共通理解を図れた。	A	理論構築
	10月	・研究会へ向けての役割提案	C	役割が多岐に渡り、資料作成に要する時間大	A	適切な運営につながった。	A	円滑な運営による研究成果の普及
	1月	・年度末に向けて ・各学年の年間活動例・シラバスの特徴の交流と見直し ・評価の観点(希望部会)	C	提案のための理論構築・資料作成	A	実践の見直しと次年度の取り組みへの共通理解を図れた。	A	理論構築
3月	・運営指導委員会のまとめ ・スコープ、シークエンス ・次年度各種様式、日程							
2年次	4月4日	・研究の方向性・研究授業保育の推進	C	提案のための理論構築・資料作成	A	研究2年次の概要とねらい、実践の具体について、共通理解が図れた。	A	理論構築
	4月15日	・「希望(のぞみ)」の目標	C	提案のための理論構築・資料作成				
	7月19日	・研究会へ向けて	B	実践のまとめ方				
	8月2日	・実践交流	B	提案資料の作成	A	幼小中の実践の具体的なイメージや相互の課題を共有できた。	A	実践記録として普及
	10月23日	・研究会へ向けての役割提案	C	役割が多岐に渡り、資料作成に要する時間大	A	適切な運営につながった。	A	円滑な運営による研究成果の普及
	1月28日	・つけたい力・態度価値観の見直し	B	例を示し、全体で協議	B	根拠まで明確に示せなかった。	A	理論構築
	3月20日	・運営指導委員会のまとめ ・次年度各種様式、日程	C	提案のための理論構築・資料作成	A	実践の見直しと次年度の取り組みへの共通理解を図れた。	A	理論構築

3 年 次	4月 4日	・今年度の研究の方向性・日程・ 推進の具体	C	提案のための理論 構築・資料作成		研究3年次の概 要とねらい、実 践の具体につい て、共通理解が 図れた。	A	理論構築
	4月 28日	・質問紙調査・単元指導案・活動 例の交流・教科との関連	C	提案のための理論 構築・資料作成	A		A	
	6月	・発達心理学研修	A	講師による講義形 式	A	幼小中の自分づ くりについて、 発達段階を踏ま えて見直せた。	A	理論構築
	7月 18日	・実践事例のまとめ方 ・報告書の記載内容・役割	B	実践のまとめ方	A	実践や評価の示 し方について共 通理解を図れた。	A	理論構築
	8月 6日	・実践事例交流 (共同研究者による指導助言)	C	報告書掲載用の提 案資料の作成	A	実践に対する指 導・助言により 実践事例の内容を 向上させた。	A	実践記録と して普及
	10月 22日	・研究会の役割を明らかにする。	C	役割が多岐に渡り、 資料作成に要する 時間大	A	適切な運営につ ながった。	A	円滑な運営 による研究 成果の普及
	3月 20日	・運営指導委員会のまとめ ・次年度の取り組み、各種様式						

5 成果・課題

評価により見えた、成果・課題は次のとおりである。(○成果・●課題)

- 研究開発実施計画に即し、資料等を活用して共通理解を図りながら、研究推進マネジメントを実施できた。
- 研究の成果物については、すべて、研究構想上必要な目的を持って作成できている。
- 資料作成の難易度Cに対し、貢献度・提案性等の効果がBであったものについては、作成目的の明確化及び効率化にむけ見直しを図る。
- 全体研究部会の内容を大別すると、①研究推進のための連絡、②理論構築のための協議、③実践交流、④講義の4種類であったが、それぞれ研究構想に従って事前準備を入念に行い、開催できた。
- 年次が進むほど、上記①の占める割合が多くなっている。「全体協議の場を増やし、個々の主体の自覚を促してほしい」等の意見があることと併せ、検討が必要である。
- 毎年8月に開催した実践事例交流では、毎回レポートを持ち寄り、報告と協議の形式をとったが、3年次は、共同研究者である広島大学の先生方を招聘し、指導助言を加えたため、さらに充実させることができた。

- 研究初年度は、理論構築のため3回講師を招いたがあつたが、2年次は0回、3年次は1回であった。限られた時間の中ではあるが、理論・実践の向上を図る講演会を設定していきたい。

6 おわりに

研究開発に係る3年間の研究推進マネジメントとその成果・課題を明らかにすることで、今後の適切な研究推進や業務の効率化につなげたいと考え、成果物等を一定のものさしで評価する形で本稿を構成した。しかし自前のものさしだけでまとめたため、客観性を誇れるものとは言い難い。今後は、実施の効果検証方法、研究組織の向上といった内容も対象としながら、より客観的な規準により改善を図ることができるよう、先行研究・実践についての研鑽をしていきたい。

<参考及び引用文献>

- 1) 広島大学三原幼稚園・小学校・中学校 文部科学省研究開発学校指定校 研究開発実施報告書(別冊・自己評価書・要約を含む)平成24年度(1年次)～26年度(3年次)